

# 子をつれて

—— 映画文学人生論

葛西善藏 (1887-1928)

『子をつれて』 (1919) 「早稲田文学」

『哀しき父』 (1912) 「奇蹟」創刊号

『贖物さげて』 (1918) 「早稲田文学」

『湖畔手記』 (1924) 「改造」

月に三十五円もあれば自分等家族五人が饑えずに暮らして行けるのである

葛西善藏は青森県出身。破滅型私小説の元祖的存在で、太宰治の先輩作家として知られている。大いに関心はあったが、つきあいたいとは思わない。君子危うきに近寄らず。

と、今まで敬遠していたが、私も今や後期高齢者。余命いくばくもない年齢になったので、もういいだろうと判断し、『子をつれて』など葛西善藏の作品を読んでみた。

『子をつれて』の父は、貧乏人の『哀しき父』である。家賃を四ヶ月滞納し、下宿を出ていけと追い立てられている。細君は、二人の女の子をつれて、遠い郷里の実家へ金策に出かけたが、音沙汰がない。男の子二人にお菜を煮たり、糠味噌を出して、食べさせた後は、酒を飲む。

「自分は大した贅沢な生活を望んで居るのではない。大した欲望を抱いて居るのではない。月に三十五円もあれば自分等家族五人が饑えずに暮らしていけるのである。たったこれだけの金を器用に儲けられないという自分の低脳も度し難いものだが、併したったこれだけの金だから何処からかひとりでに出て来てもよさそうな気がする」。

などと、のんきなことを言っているが、金は何処からもひとりでは出て来ない。一日に一升位飲む酒代や淫売婦と遊ぶ金がある。そこで、晩の米が無いから、明日の朝食食べる物がないから――



# 子をつれて

映画文学人生論

と云っては、その度に五十銭一円と友人たちになだつて来た。

同業の私小説作家は、こんな男とつきあつても彼をモデルにした小説を書けば、もとがとれる。かわりをもつて、ひどい目にあつた被害者で、可哀想なのは細君と愛人のおせいだ。

細君とは二十一歳のとき、郷里の津軽で見合結婚した。岳父に無心した金で上京し、大洗に半歳滞在したが、酒を飲んでいただけで、何も書かない。半ヶ年の放浪は何物をもたらさなかつた。

しかし、「放浪そのものに価値があつたと言へる」と、友人の光用穆宛の手紙で自己弁護している。「全く此度はと命がけで自分を主張し実行したのだ」「文芸の前には自分も勿論、自分に付属した何物をも犠牲にしたい」。

おせいのモデルは鎌倉建長寺の近くの仕出し屋の娘。建長寺内宝珠院で暮らしている作家と息子にご飯を運んでいるうちに情が通じてしまった。

『湖畔手記』は悲鳴をあげながら奥日光の湖畔の宿へ逃げてきて、郷里の妻宛に書くつもりの手記だが、妊娠三ヶ月で胎児を始末したおせい宛のようなどころもある。父の三回忌にはおせいを郷里へ連れてゆき、妻の了解をとろうとさえた。

白根山、雲の海原夕焼けて、妻し思へば、  
胸いたむなり。

秋ぐみの、紅きを噛めば、酸く渋く、  
タネあるもかなし、おせいもかなし。